

「こども」と「子ども」と「子供」

■新編集講座 ウェブ版 第52号 2016/5/15

毎日新聞社 技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

5月5日は「こどもの日」。当日の紙面には、「こども」に関するたくさんの記事が掲載されました。でもよく見ると、表記は「こども」に「子ども」「子供」と様々です。単に「子」と書いてある見出しもありました。なぜ多様な書き方が混在しているのか、見出しを中心に、理由を考えてみました。背景には、「こども」や日本語に関する多様な見方や考えがうかがえ、単なる表記の問題として扱うことはできないように思えます。

■ 同一紙面に複数の表記

右欄に、5日朝刊から「こども」に関する記事をいくつか拾い出してみました（特記事項以外は東京本社最終版）。

1面コラムの「余録」=右図①=と、2面の人口に関する記事=右図②=は、本文に「子ども」と記載され、②の記事では、見出しも「子ども」です。ただし「こどもの日」は「国民の祝日に関する法律（祝日法）」=右欄参照=で定められた名称のため、②の記事も、書き出し部分は「こどもの日」と、「こども」表記を使っています。

この点、5面「社説」=右図③=も、見出しと書き出しは法律に合わせ「こどもの日」としていますが、本文は「子供」です。同様に、4面の「ひと」（アグネス・チャンさん）=右図④=も、本文は「子供」を使っています。

異色なのは大阪本社の社会面=右図⑤。本文は「子供」ですが、見出しは単に「子」です。見出しならではの歯切れの良さやリズム感を狙ったのでしょうか。

■ 登場の頻度は互角

「子ども」と「子供」の混在は、見出しでも顕著です。昨年調べたことがあり、その結果を例示しましょう。

まずは「子ども」の例から。「子どもが自由に遊べる環境」を求めたスポーツ面の記事=右図⑥=をはじめ、社会面=右図⑦、夕刊ワイド=右図⑧、国際面=右図⑨=と各面にわたり、読者の投書=右図⑩=もありました。

他方、「子供」も負けていません。スポーツ面の「子供が夢育む好機」=右図⑪=をはじめ、社会面=右図⑫、芸能面=右図⑬、国際面=右図⑭=と、様々な面で使用例がありました。投書に登場する=右図⑮=のも同じです。

見出しへの「子ども」と「子供」の登場頻度はほぼ同じ。記事の表記に応じて見出しも変わる傾向があります。

(左) ①1面「余録」 (上) ②2面

(右) ③5面「社説」 (下) ④4面「ひと」

(右) ⑤社会面大阪

■ 母に感謝する日「祝日法」抜粋
 第二条 「国民の祝日」を次のように定める。
 こどもの日 五月五日 こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する。
 ◇
 前半の趣旨は納得できますが、「母に感謝する」とあるのはどうなのでしょう。「父はどうなんだ」という声が聞こえてきそうです。何より、さまざまな事情で母のいない子どもも健やかに育つ環境を作るのが大人の責任だと思います。

(左) ⑩15/11/3朝刊投書面
 保育所民営化と子どもの利益
 子どもの急病親ができることは
 子供が夢育む好機
 子供に原因不明まひ
 「子供と動物」異色作
 子供が夢育む好機
 子供に原因不明まひ
 子供が夢育む好機

(左) ⑬15/10/26 夕刊芸能面
 (下) ⑭15/10/31 朝刊国際面
 (右) ⑮15/10/22 朝刊投書面

■ 両派それぞれに理由

以前の本文記事で、この問題を取り上げたことがあります=右欄参照。そこには、単に表記の問題とは言い切れない「世界観」のようなものが感じられました。

この記事から、まずは「子ども」派の主張をご紹介します。「子どもの文化研究所」などは、「『供』には『お供』という意味があるが、こどもは大人のお供ではない」「こどもは大人の添え物ではない」と述べます。

「こどもの人権を重視した」と主張するわけです。

これに対し「子供」派は、語源を論拠に反論します。国立国語研究所の甲斐睦朗所長(当時)は、「『ども』は複数を表す接尾語で、『こども』は子の複数形だった。それがだんだん大人の対義語となり、1人でもこどもと呼ぶようになった」と説明。「『供』が当て字として使われただけ。『子供』という言葉に、付録的な意味や見下げのような意味はありません」と断言しています。

このように「こども」「子供」それぞれに理由があり、本来「人それぞれ」でいいはずです=右欄参照。でも、先の記事によると、他の表記を認めず勝手に書き換える動きが出てきたため、問題がこじれてしまったようです。

■ 「子供」を「子ども」に書き換え

「はれときどきぶた」で知られる童話作家の矢玉四郎さんによると、文章の「子供」を雑誌編集者に「子ども」に変えられたそうです。矢玉さんは「教育現場では『子ども』と書くよう強要される」「お供の供だからダメと、使える漢字を使わないのは変だ」と批判します。

同じ記事で、「子ども」派の作家、落合恵子さんは「言葉の成り立ちは分かって、供の字にひっかかる。私自身は『子供』は使いたくない」と話しています。これなら分かるし、その感覚は尊重したいと思います。「子ども」を使うな、と言うべきではないでしょう。

でも世の中には「子ども」にひっかかる人もいます。たとえば翻訳家の柳瀬尚紀さんは、「『子ども』では『ガキども』を連想して子供に申し訳ない」と書いています=右欄参照。こういった方に「『子供』ではなく『子ども』を使え」と押し付けるのはおかしいと思います。

■ 要は「こども」のために

ある社団法人がこの問題を広報誌で特集したことがあります=右欄参照。結論から言うと、「どの表記でも自由に」という立場です。要は、「一つの表記にこだわり過ぎて、コドモ(中立の立場上、「子ども」「子供」の表記を避けた)の現状について考え行動する人々を分断してはいけない」。10年以上前に書かれた文章ですが、その趣旨に共感します。「子供」でも「子ども」でもいい、こどものことを考える姿勢が大切なのだと思います。

■ 表記の混在を容認

毎日新聞の表記のルールを定めた「毎日新聞用語集」によると、「小供」という表記は認めず「子供」に直すよう求めています。また5月5日の祝日は法律に合わせ「こどもの日」と定めています=左図。

同時に「用例で漢字を使っているところを仮名書きにするのは差し支えない」との規定もあります。従って、「こども」「子ども」「子供」いずれの表記を使っても構わないわけです。

「同一紙面に表記の混在はおかしい」との考え方もあり得ますが、筆者の考え方や紙面の雰囲気や尊重し混在を認める立場もあるのです。

こども
祝日は「こどもの日」
(小供)↓子供

■ 「おとな」と「大人」

論争を呼んでいる「子ども」と「子供」ですが、さて、対義語の場合はどうでしょうか。紙面データベースを見ると、「おとな」と「大人」、両方の使用例が見つかりました。一例を掲載します=下図。

おとな旅・神戸

(上) 14/2/2 兵庫版
(下) 16/4/14 夕刊芸能面

NHK金曜夜ドラマ「コントレール」

切ない大人の恋

脚本家・大石静、禁断の関係を描く

港町・神戸をそぞろ歩くのが「おとな」で、切ない恋に身を焦がすのが「大人」。

あくまで私個人の印象論ですが、かなで書いた「おとな」は、大らかでのびやかな人。漢字の「大人」は、酸いも甘いも知り尽くした人生の達人というイメージがあります。

表記の混在に思い悩んだり、用語の統一性を無理強いしたりするよりも、「表記の混在は、多様な文字体系を有する日本語の豊かさの表れだ」と、私は前向きにとらえようと思っています。

ついでながら、「子供」という表記も差別とおっしゃる人がいる。「子ども」という表記でなければならぬというの、ぼくに言わせるとお笑いです。「子ども」では「ガキども」「野郎ども」「男ども」「女ども」を連想して、かえって子供に申し訳ない。ぼくはずっと「子供」で通しています。

■ 「野郎ども」「女ども」「子ども」
翻訳家の柳瀬尚紀さんの「日本語は天才である」(新潮文庫)には、「子ども」では「ガキども」「野郎ども」「男ども」「女ども」を連想して、「かえって『子供』に申し訳ない」と記されています=右図

社団法人大阪市人権協会
「ヒューパワー」23号
04/10/30 発行